

050

「水害逃げ遅れゼロへ！」豪雨災害の被災住民による、まちの復興プロジェクト

取組主体

川辺復興プロジェクトあるく

従業員数

20人

想定災害

水害等

実施地域

岡山県

- 平成 30 年 7 月豪雨災害の被災住民が中心となって、まちの復興、地域防災力の向上に取り組む。「防災おやこ手帳」によって防災への関心を喚起し、「黄色いタスキ大作戦」によって災害時の逃げ遅れゼロを目指す。

1 取組の特徴（はじめたきっかけ、狙い、効果、工夫した点、苦労した点）

平成 30 年 7 月豪雨の被災住民が中心となって、まちの復興を目指す

- 平成 30 年 7 月豪雨で甚大な被害を受けた倉敷市真備町川辺地区は、約 1,700 世帯のうち 99%以上の家屋が浸水等によって壊滅的な被害を受けた。被災直後は避難所や十分な支援拠点がなく、コミュニティを主体とした活動が難しい状況であった。そのような中、被災した川辺地区の子育て世代が中心となり、同年 10 月に「川辺復興プロジェクトあるく」を発足し、支援物資や炊き出し、様々なボランティアの受け入れと、被災住民への提供を行った。
- 同プロジェクトでは、「地域力＝防災力」であることを踏まえ、以下の 3 つの柱で活動を継続している。
 - ①つながりや触れ合い、生きがいづくりに関する事業
 - ②安心して暮らすことができるまちづくりに関する事業
 - ③豪雨災害を風化させず、経験と学びを県内外の人に伝える事業
- 被災時には地域住民の情報共有の場としてグループ LINE を作成し、令和 3 年 12 月現在で約 600 人が参加している。LINE を通じ、平時にはローカル情報の共有を行うとともに、緊急時には避難を開始するきっかけの 1 つとなるように、避難準備の呼びかけや防災情報の共有を行っている。
- 被災経験から、災害に対する不安を抱えながら生活している住民が多い中で、知りたいこと、学びたいことを少人数で学ぶための会である「防災カフェ」を月 1 回ペースで開催しているほか、住民一人一人が自分ができることや地域の中でやりたいこと等を出し合い、これからの川辺を語り合う会として「川辺みらいミーティング」を開催している。
- 「川辺みらいミーティング」では、地域防災の取組の推進を目指し、マイタイムラインの作成研修会、豪雨災害を振り返り避難について考えるワークショップ、指定避難所だけに頼らない分散避難「マイ避難先」の選定、避難ルートについて考える「防災まち歩き」、小学生との合同報告会、地域で声を掛け合ってスムーズな避難を目指す安否確認訓練等に取り組んだ。
- 防災分野の専門家等の外部講師を招いた勉強会開催や、コロナ禍によって対面で集まっての開催が難しい際には YouTube の生配信、アンケートによる住民の意識調査を行うなど、工夫を凝らして継続している。



防災カフェの様子



川辺みらいミーティングでの防災マップづくりの様子

国土強靱化

子育て世代や防災初心者にわかりやすく伝える「防災おやこ手帳」

- 令和2年10月、豪雨災害の後悔と学びを被災地の方に伝え、防災のきっかけ作りになるように、オリジナルの防災冊子「防災おやこ手帳」を作成した。冊子には、真備町の被災したパパ・ママを対象に行ったオンラインアンケートに寄せられた声と、あるメンバーの経験、そして川辺地区の防災の取組等のノウハウを詰め込んだ。
- 防災おやこ手帳は、令和4年2月時点で約18,000冊が配布されており、川辺地区の取組について講演を行う際にも使われている。防災行動は、その必要性を理解し納得することや、災害をリアルにイメージできることが大切であるため、実体験を盛り込んだ話と共に、防災おやこ手帳の内容に触れることで、受講者がより自分事として捉えやすいようになっている。



防災おやこ手帳表紙

逃げ遅れゼロを目指す「黄色いタスキ大作戦」

- 豪雨災害発生の際、近隣住民の避難の声掛けに手間取ったという声が多くあった。そこで、同プロジェクトでは、令和3年3月、黄色いタスキに「無事です」と書かれた安否確認ツールを作成した。
- 町内会長や各種団体の協力を得て全戸配布を目指し、被災後の住居状況の把握も並行して行いながら、令和3年12月時点で約1,300世帯に配布した。タスキは、平時には玄関等の目につく場所や非常用持ち出しバッグに結んで保管し、地震時は怪我人がなく家族全員が無事であれば、また、水害時には避難する前に、それぞれ玄関付近の目立つところに結ぶよう、啓発活動を行っている。



配布用の「黄色いタスキ」を用意する様子

2 現状の課題・今後の展開等

- 「防災おやこ手帳」に載せきれなかった情報を集めた第2弾が完成し、令和4年3月時点で6,000冊の配布が完了している。また、外国の方向けに英語版を作成、HP上で公開しており、今後は中国語版の作成も計画されている。一方で、現状は助成と寄付による取組のため、今後の継続に向けて金銭面での課題を感じている。
- 黄色いタスキについては、配布して終了ではなく、有事に実際に活用できるようにするため、継続的かつ定期的な防災訓練の開催が必要だと感じている。訓練を行いながら課題を抽出し、地域防災力を上げていきたいと考えている。

3 周囲の声

- 同じものを地域全体が持っているだけで、心強く感じる。次に何かあった時には、必ず逃げ遅れをなくしたいと思った。タスキを活用した、避難の仕組みづくりを進めていきたい。（「黄色いタスキ」に対する声）

担当者の声

- 私たちは、もう2度と平成30年7月豪雨災害の時の苦い経験を繰り返したくないと活動を続けています。避難していても、ご近所や知人に避難の声掛けができず、結果、たくさんの方が垂直避難で命の危機を感じ、ボート等で救助されました。避難しても後悔、避難していなくても後悔をしたのです。
- もっと声掛けができる仕組みを作っていれば、もっと防災の知識があれば、救えた命と守れた心もあったのではないかと思います。だからこそ、地域防災を進めながら、その経験を伝える活動にも力を注いでいるところです。
- ぜひ、私たちのメッセージを汲み取っていただき、皆様の命と心が災害から守られますように願っています。

問合せ先

川辺復興プロジェクトあるく
TEL : 080-5752-0111 E-Mail : aruku.2018.10.18@gmail.com

サイト URL



動画

